



talk! talk! talk! アナウンサー・深澤里奈さん



アナウンサー 深澤里奈さん

元フジテレビアナウンサー、現在はフリーランスとして幅広い活動をアグレッシブに行っている深澤里奈さん。幼いころから写真がとて好きで、写真を撮らない日はないという。自分以外の誰かと感動を共有できる材料として、人とつながるツールとして、日々を綴るように写真を撮る深澤さんに写真の楽しみ方をたくさんお話しいただきました。

プロフィール

ふかざわりな。1974年東京都生まれ。フジテレビアナウンサーを経て、現在はフリーランスとして幅広いジャンルで活躍中。文化・芸術に精通し、アナウンサーの仕事以外にも執筆活動、商品デザインやプロデュースなどにも意欲的に取り組んでいる。2008年度には世界最大の家具見本市「ミラノサローネ」に、大手企業と組んで作品を出展予定。また、京都老舗呉服店にてプロデュースした帯は、多くの女性から支持を集めている。ワインに関する資格「WEST認定INTERMEDIATE CRETIFICATE」を持つほか、15歳の頃から家元に直接師事する、直門として入門した江戸千家での茶道歴は18年になる。
雑誌「an・an」でのグルメエッセイをまとめた、「極上のおやつ」（マガジンハウス）が発売中。

Beginning 出会い

私たちの世代は 写真の青の時代！？

写真に興味を持ち始めたのはいつ頃だったのですか？

もともと小さい頃から家にあったカメラを触るのが好きだったんです。古いアナログカメラのずっしりとした重さや、自分でフィルムを巻く作業なんかがとても好きでした。親の目を盗んではカメラを触ったり、フィルムが入っていないときに撮るまねをさせてもらったりしていましたね。

小さな頃からすでにカメラの虜だったのですか？

そうですね。シャッター音も好きでしたし、ファインダーをのぞくことも楽しかったですね。ファインダーをのぞいて、はじめはぼんやりとしか見えない視界が、ピントが合った瞬間ぴたっとクリアに景色が広がる。その感覚がとても気持ちよかったです。中学に上がったときに、部活動とは別にクラブ活動にも入ったのですが、そのときに写真クラブを選び、親からオートの一眼レフカメラを買ってもらいました。それで代々木公園に写真を撮りに行ったり、クラブでは現像の方法を教わってもらったり。でも、実は講義はほとんど聞いていませんでした（笑）。

中学生の頃から、自分のカメラを手にして写真を撮り始めていたのですか？

そうですね、でもちょうど私たちの世代は、写真のダメな時代だったような気がするんです。というのは、中学生の頃にレンズ付きフィルムが発売されるようになって、写真を撮るすごく手軽に楽しめるようにはなったものの、ひとつのカメラを愛用するという形は少なくなりましたよね。コンビニや写真屋さん、スーパーでもどこでもカメラが手に入るから、旅行にでかけるときもカメラは旅先で買うような。たとえば家族で使っていたカメラを受け継いで使うとか、そういったことがなくなりつつあって、何だか私は少し寂しい気がします。カメラに対しての思いがあまり豊かじゃない、貧しい時代。ピカソで言う青の時代みたいなイメージなんです。かくいう私も、日常的に使っていたカメラはレンズ付きフィルムでしたし。

深澤さんは、日常用のレンズ付きフィルムと、本気で撮るとき用の一眼レフカメラとで使い分けていらっしゃったのですか？

はい。旅行に行くときなどには一眼レフカメラを持って行きました。中高生の頃は、毎年海外にホームステイをしていて、そういった際には特にたくさん撮りましたね。36枚撮りを7、8本くらい撮って帰ってくるので、親が「もったない！」と言って途中からはハーフカメラを持たせていました（笑）。ちゃんと自分で選んで、カメラを買ったのは社会人になった頃。もっとイメージ通りに撮れるようになりたいという気持ちが出てきて、どのカメラが自分に合っているのかいろいろ詳しい人に聞いて情報を集めました。

社会人になってからさらに本格的に写真を撮りたいと思われたのは、アナウンサーというお仕事柄、撮られる側になったり、プロのフォトグラファーの方と接する機会が増えたからだったのですか？

いえ、そういった環境に影響を受けたわけではないと思います。どちらかという、仕事とは全く切り離したもとして写真を撮る楽しかったんです。仕事を機械的に感じることもあって、新しいカメラを持つことで、小さい頃カメラを触ったときに感じたワクワク感や感激を求めたのかもしれない。それで初めてデジタルのコンパクトカメラを買って、次にフィルムのレンジファインダーのカメラを買いました。

Pleasure 楽しみ

暗室バーで お酒を飲みながらプリント！

撮影するときのポイントはありますか？

最近は被写体に寄って撮ることが多いです。撮った写真を見返していて私が好きだなと思う写真は、シャッターを押した瞬間の空気感が写り込んでるものなんです。だから.....構図とかになるのかな？でも、撮っているときはほとんど無意識ですね。

中学生の頃は写真クラブに入っていたとおっしゃっていましたが、ご自分でカメラを買ってから写真の勉強を改めてされたということはありますか？

ちゃんと勉強したり、誰かにきちんと教えてもらったりはしていません。でも写真展に行ったり、写真集を見るのが好きなので、勉強といういい刺激は受けていると思います。あと、友人で写真好きの方が多いので、情報交換したり一緒に楽しんでいるという感じです。よく行くバーのマスターも写真好きなんですけど、マスターは営業していない時間にバーを暗室にしてプリントしているんです。だから私もモノクロフィルムを持って行って、一緒にプリントさせてもらったりしているんです。プリントが楽しくて気分が乗ってくると、バーにあるお酒を出してくれるんですよ。それで二人で飲み出すんです。お酒が入ると余計に調子乗ってきて、本来開けちゃダメでしょっていうような貴重なワインを飲んでしまうなんてこともありました（笑）。

すごく楽しそうな暗室ですね！ 普段はモノクロで撮られることが多いのですか？



そのときの気分によってモノクロとカラーを使い分けていて、だいたい半々くらいですね。南の島へ行くというときはやはりカラーです。でもフィルムで撮るときは、モノクロの方が好きですね。

最近はどんなものを撮っていらっしゃるのですか？

デジカメは持ち歩いているので、ブログに載せることも考えながら毎日何かしらいろいろなものを撮っています。フィルムカメラではモノクロで人物を撮ることが多いです。こちらのカメラは重くて持ち歩くのが大変なので、ホームパーティなんかの際に家に来たお客さんを撮っているんです。必ずお酒も飲んでいるから、露出とか結構めちゃくちゃになってしまうんですが、モノクロだとプリントするときに明度の調節がある程度できるし、多少部屋が散らかっていても、色がない分目立たないというメリットがあるんです（笑）。

なるほど、モノクロ写真のいいところですね（笑）。人を撮る面白さとは何だと思われますか？

やはり人が被写体だと思入れが強くなるし、その分その場の楽しさや撮る側の嬉しさが写真に反映されると思うんです。父の還暦祝いに撮った写真や、友人の結婚式で撮ったときの写真は今でも心に深く刻まれていますね。

具体的にどんな写真だったのか教えていただけますか？

父の還暦祝いをした際に、生まれ年のワインをプレゼントしたんです。父とは3歳の頃からべつべつに暮らしていたこともあって、そのときの嬉しそうな父の顔が私も嬉しくて、撮っていてすごく思入れが強かったです。言いにくい話なんですけど、母と父と私と三人で食事をしたこと自体が相当久しぶりだったんです。父と母が笑い合っている光景も、私の記憶にはずっとなかったものなので、二人が笑い合っている瞬間の写真は宝物で、今でも部屋に飾ってあります。

友人の結婚式で撮った写真は、決定的な瞬間でした。結婚式のプログラムに、新郎新婦がみんなに結婚証明書を見せる場面があったんですね。でも結婚証明書を忘れてしまって、それに気づいた瞬間、「忘れて来ちゃったね！」って言って二人で指をさして笑い合ったんです。そのすごくかわいい光景を撮ることができて。友人には後日結婚式で撮った全ての写真をCD-ROMに焼いてプレゼントしたんですが、彼女も指をさして笑い合っている写真が一番好きだって言っていました。

深澤さんとご友人の気持ちが通じあっていたんですね。

そうですね、そうだとすごく嬉しいです。

Photo's 作品紹介

深澤さんの心を動かした瞬間が写る写真たち



還暦ワイン



いつも笑おう



はじめてのミルクはどんな味？



君となら



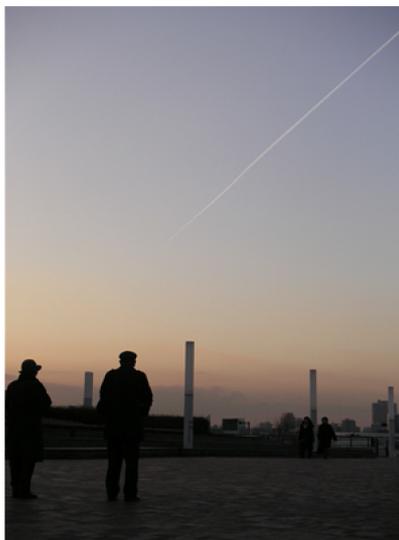
まっすぐじゃなくて、いいじゃない



ロンドンと噴水



ロンドンと川



夕焼けの魔法



地球と遊ぶ



利尻富士とカモメ

Future これから

写真は瞬間、瞬間を綴るもの

写真のどこに魅力を感じますか？

時間や空気、感じたものを誰かと共有できる場所ですね。私がなぜ写真を撮るのかと言うと、小さなことでも感動した瞬間を切り取って、プリントして、形にした状態で自分以外の大切な人とその瞬間を共有できるからなんです。共有できることがとても楽しいし嬉しい。写真を一人で見返しても、私は楽しさを感じないんですね。何かの記録のために撮っているわけではないので。

シャッターを押したときの感情を、自分以外の人と分かち合えることは素敵なことですね。

たとえプリントしなくても、今ならブログにアップしたり、メールで送ったり、そういった形で写真を見せることができますよね。「きれいな海の写真が撮れたよ！」と友人にメールで送ると、「一日中パソコンの前にいるから癒されたよ」なんて言われて私も嬉しくなれるんですね。

深澤さんにとって写真は人とのつながりを感じるものでもあるんですね。

そうですね。私にとって写真は日々を綴っていくものというイメージ。そこにはいろいろな感情や人とのつながり、時間などがあるんです。

今年のお正月に親戚の家に行った際にも、人とのつながりという点で面白いことがあったんです。その親戚宅は一度も引っ越しをしていない家で、膨大な写真が残っているんです。みんなでアルバムをいろいろ見ていたら、私のひいお婆ちゃんの嫁入りの写真が出てきたんです！ 大正8年ですよ。

すごいですね！ それは貴重な写真ですね。

そうですね。その時代って写真を撮ること自体が今とは違ってすごく大変なことですよ。お金もとてもかかったでしょう。だからでしょうか、アルバムの整理のし方も本当にきちんとしています。達筆な字で「〇〇、結婚の儀」と書いてあって（笑）。それを見ていたら、写真に対しての真摯な気持ちに胸を打たれました。だから、乱写したり、撮った写真がパソコンの中で整理もされずに眠っているだけになっている状況などは寂しいことだなと思うんです。

確かに、デジタルで撮った場合はパソコンに入れて満足してしまうこともありますね。

私は、気に入った写真はやはりプリントしなくてはと思うんです。スライドショーなどにしてもいいと思うんですが、とにかく見返せる状態にするということがすごく大切。大正8年にちゃんとアルバムをつくってくれていたから、平成20年に私たちが見ることができているんですよね。ずいぶん昔に亡くなっているひいお婆あちゃんの写真を、母や叔父、叔母、私も含めて子孫たちが一



緒に見て、楽しく話している。それってすごいことだなあと感じました。まさにこれが写真のもつパワーだなと。こういうために写真を撮らなきゃ！って思ったんです。

アルバムは財産ですね。では、これから撮ってみたいものなどはありますか？

すごい先の話になるかもしれないんですが、自分の子供の写真を撮りたいですね。撮り過ぎるくらい撮るだろうなと思います。デジカメで撮って、写メールでとって、フィルムで撮って。愛すべき存在を撮りたいですね。

いつか生まれてくるお子さんを撮りたいというのは素敵な夢ですね。

はい。いろんな夢がそこに潜んでいます（笑）。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.